

百六卷・明治十年六月・司法省伺」、国立公文書館所蔵、公02120100)。

- (11) 「華族内藤正誠犯罪適法ノ件」(『公文録・明治十三年・第五十八卷・明治十三年五月・司法省(一)』、国立公文書館所蔵、公02886100)。

- (12) 「華族内藤正誠位記返上ノ件」(『公文録・明治十三年・第一百三十二卷・官吏進退(叙位)』、国立公文書館所蔵、公02763100)。

- (13) 酒井信彦「『華族類別録』について」(『東京大学史料編纂所報』十五、一九八〇年)。

- (14) 家令とは華族の事務機構の長。華族は、一年行政官達第五七六、三年太政官布告第五八一によって家令、家扶、家從を置き、家令は一名、他は適宜とすることが定められた。

- (15) 千田稔「華族資本の成立・展開」(『社会経済史学』五二一)、一九八六年)、森田貴子「華族資本の形成と家政改革」(高村直助編著『明治前期の日本経済』日本経済評論社、一九〇四年)、「明治期の旧藩主家と社会」など。

- (16) 抽稿「大名華族資本の誕生」(『史学雑誌』一二四一二、一九〇五年)。

- (17) 註(1)『華族会館史』五四六頁。

- (18) 上野秀治「明治期の宗族制と安倍氏」(『学習院大学史料館紀要』一一、一〇〇一年)。

- (19) 「明治一〇年代華族社会における宗族」(尚友俱楽部、華族史料研究会編『四條男爵家の維新と近代』二〇一二年、同成社)一三四(一三五頁)。

- (20) 註(8)『昭和新修 華族家系大成』。

- (吉川弘文館 二〇一五・一二刊 A5 二七二頁 八〇〇〇円)

倉本尚徳著

『北朝仏教造像銘研究』

稻本泰生

一

本書は一〇〇七年以來、一貫して中国北朝時代の造像銘(造像記)に関する論考を発表してきた著者による、博士論文を母体とする大著である。北朝造像銘は五世紀後半にその数を増し始め、北魏の洛陽遷都後膨大なものとなる。著者はこれを空前の規模で蒐集し、用語と文章に綿密な検討を加えることで、史書や仏典の記載だけからはうかがえない信仰の現場の状況を、多彩な視点から描き出すことに成功している。

北朝造像銘研究の礎を築いたのは清朝における金石学の隆盛やその書法に対する関心の高揚であるが、これが近代歴史学の水準に押し上げられる過程で日本人研究者の果たした役割は大きい。龍門石窟の造像銘の詳細な分析によって北魏仏教史を描き出した塚本善隆氏、資料の網羅的検討から膨大な情報を引き出し体系づけた佐藤智水氏らの業績が代表である。本書はその衣鉢を正しく継ぐものだが、「塚本・佐藤の研究でほとんど言及されなかつた、北魏の東西分裂から隋に至る時代の、各地に残された造像銘の内容からうかがうことのできる地域社会における仏教信仰と実践の様相を、考古・美術史方面で盛んに研究されている地域性の問題

を重視しつつ明らかにする」(一八〇) という言葉が示す通り、時代・着眼点・方法のいずれをとっても、未開拓の領域に足を踏み入れていている。

造像銘研究を取り巻く状況は近年、実物資料そのものの飛躍的な増加のみならず、京都大学人文科学研究所などによるウェブ上での拓本写真公開、文献検索や図表制作ツールの発達などによって大きく様変わりした。利便性が増す一方で中国はもとより諸外国でも研究は厚みを増し、競争も激化している。著者は先行研究のほぼ全てに目を配って(巻末に参考文献目録が備わる)掲載作例の統合再編を行っているが、資料の網羅性、情報処理の精度と体系性、歴史・思想両面にわたる該博な知識を駆使した考察の犀利さなどにおいて、本書は他の追随を許さない水準に達している。今後必ず参照されるべき基本文献となることは疑いない。

著者は造像銘の存在形態として①造像実物、②造像の写真を収めた図録、③拓本または拓本写真、④『金石萃編』などの歴代金石著録、⑤学術雑誌や資料集に掲載される銘文の移録、という五種を挙げ、その全てを検討対象とする。研究過程で蒐集された紀年造像銘は佐藤論文(「北朝造像銘考」初出一九七七)が対象とした一三〇〇件の倍近く、北朝で二三九四件、隋を併せるに実に二九六七件に達する(二二頁)といふ。また現地におけるフィールドワークにも精力的に取り組み、録文の精度向上に努めるとともに、自身が移録した未発表の造像銘の釈文も提示している。

本書は①造像銘の各要素の統計的処理を行う、②語句の典拠調査から経典との関係を明らかにする、という二つの明確な目的を

掲げており、おおむね第一部・第二部に対応している。各章には論点に応じて大量の情報を整理した図表が挿入され、これ自体が貴重な成果である。また「附録」として掲載される一〇〇頁に及ぶ一覧表は、著者が蒐集した造像銘のうち信徒集団による事例を地域ごとに分類し、成員の肩書の種類と数、尊名・奉為・官職名などの情報を抽出、年代順に配列している。本文で展開される分析・考察の基盤の役割を果たすとともに各地域の違いが一目でわかり、資料集として使うにも便利である。

本文部分の構成は以下の通りである。

序論

第一部　邑義造像銘の概要とその地域的特徴

第一章　北朝邑義造像銘の概要と感應思想

第二章　造像銘と仏教經典

第三章　南北朝時代における多仏名石刻・懺悔・称名信仰と関連して

第四章　北朝時代における方等懺と称名信仰

—『大方等陀羅尼經』十二夢王石刻図像の新発見とその意義—

第五章　南北朝時代における『大通方広經』の成立・流布とその懺悔思想

第六章　北朝期における『菩薩瓔珞本業經』実践の一例
—陽阿故郷村造像記について—

- 第五章　『高王觀世音經』の成立と觀音像
- 第六章　『觀世音十大願經』と『觀世音佛』
- 第七章　北朝・隋代造像銘に見る西方淨土信仰の変容
- 『觀無量壽經』との関係を中心に—
- 結論

二

序論と結論に著者自身による概括的記述があり、各章末尾にも的確な要約が備わるため重複を免れないが、以下目次の順に内容を紹介しておく。

第一部第一章では造像の単位にまつわる基本用語の定義ないし概念規定がまず問題となり、以後の議論に道筋がつけられる。著者は「邑義」を信仰組織・集団の成員すなわち人とする一方、「義邑」の語を团体と限定するのではなくその「分析概念」として使用することを明言し、複雑な議論のある呼称問題に慎重な立場をとりつつも「仏教的徳義の体現者としての人」こそが重要であるという見解を示す。ついで北朝造像銘の文面が検討され、そこには盛られた内容の基本構造や用語の傾向を抽出整理することで、その全体像の輪郭が姿を現す。さらに当時の造像銘に貫いていた論理であり、衆生が仏と関わることを根拠づけていた感應思想の表出の諸相が、詳しく分析される。ここでは造像行為そこに盛られた内容の基本構造や用語の傾向を抽出整理することで、その全体像の輪郭が姿を現す。さらに当時の造像銘に貫いていた論理であり、衆生が仏と関わることを根拠づけていた感應思想の表出の諸相が、詳しく分析される。ここでは造像行為そし

て造像の場の核心にある思考と論理構造が豊富な事例をもとに解説されており、仏教美術研究者にとっては本書の中で最も学ぶべき点が多い部分といえるかもしない。

めるという歴史的変遷が明らかにされる。論点は多岐にわたるが、本章でも多種多様な邑義肩書の徹底的な分析が行われ、統計的に傾向が導き出されている。その上で特に重要な作品を取り上げられ、集団の構成と性格をそれぞれの事例に即して仔細に検討することで、厚みある考察が展開されている。

第二部では北朝時代の造像銘及び仏教經典の関係が、同時代の石經はもちろん敦煌文獻をも検討対象に組み込んで追究される。

著者のいう「一步すんだ仏教思想史的考察」は偽經の形成・普及の過程、また像前で行われる礼仏行為（特に懺悔儀礼）との関係に及ぶ。各論に相当する部分だが、本書の価値を高める瞠目すべき成果が凝縮されているため、以下でやや詳しく紹介する。

まず第一章では仏名經典類の内容を精査した上で、多仏名が付された造像の重要作例にあたって經典の記載との照合がなされ、仏名唱礼による懺悔滅罪の様態に検討が加えられる。多仏造像の解釈には「制作行為自体に伴う功德の獲得」と「完成後の儀礼」のいずれに重心があるか、匿名性が強い化仏か個別の名をもつ仏の集合体か、などの問題が伴うが、著者は仏の名号の礼拝称名が現世利益に深く関わる点を実例に即して明らかにするとともに、自由に取捨選択が行われていた石刻仏名が、隋代にはより經典に忠実なものへと至るという桐谷征一説の妥当性を再確認する。また山西西南部に『大通方広經』『菩薩瓔珞本業經』『大方等陀羅尼經』など懺悔と深く関わる偽經に基づく仏名を表す事例が集中する事実を指摘し、当該地域における悔過儀礼さらには菩薩戒授受の様相に輪郭を与える。

定の懺悔行法（方等懺）の実践を特定地域（山西南東部）の義邑における信仰と結びつけて解明し、「初期密教圖像」というにとどまっていた先行研究から議論を大きく前進させた。

第三章は北周保定二年（五六二）銘の陳海龍造像碑（山西博物院蔵）に特に注目し、そこに刻まれた仏菩薩名の典拠を『大通方広經』（大通方広懺悔滅罪莊嚴成仏經）と特定、本品を山西西南部の義邑で比丘尼の指導の下、同經に基づく懺法が実践されていたことを示す事例と位置づける。著者は經文の綿密な分析から同經の成立時期を南朝梁初と結論づけ、その最も重要な依用經典が『涅槃經』であり、三宝が一体で常住であるとする説、闡提成仏の思想など『涅槃經』の要素が發展的に取り込まれていることを考証するとともに、前章で検討された『大方等陀羅尼經』から『大通方広經』へという流行の変化を跡づける。

第四章は北齊河清二年（五六三）銘の陽阿故県村造像記を中心とした考察である。本造像記は原石・拓本とも未確認で『山右石刻叢編』の錄文があるのみだが、著者は原石における文字配置の復元案をも提示し、邑義たちの間で行われた菩薩戒儀礼の実態に展望を与える。本造像記に記される多数の菩薩名について、著者はこれが六世紀末頃に南朝で成立した可能性の高い偽經『菩薩瓔珞本業經』所説の四十二賢聖の法門に照應することに注目し、菩薩戒の授与についての具体的な叙述があり天台における菩薩の階位説にも大きな影響を与えた同經に基づく実践の様相を論述する。本品で造形化された菩薩名に対応する像の姿（菩薩形か否か）が確認できないため、さとりに至る各段階の何が造形化されているか認できないため、さとりに至る各段階の何が造形化されているか

本章末尾で著者は、一見対立している淨土教と三階教が実は北朝時代の雑多な仏名を整理する方向性を共有しており、主要な仏に集約する方向に進めば阿弥陀仏信仰、その逆を極端にする方向に進めば普仏思想に収斂することを指摘する。仏前における称名の実践とそこで礼拝対象となる尊格、両者の関係性の本質をついた提言であり、北朝から隋唐へと至る仏教史・仏教美術史を展望する上で、非常に有効な座標軸が提示されている。

第二章から第四章では第一章における概観をふまえ、山西省で制作された重要作例を素材として、懺悔滅罪と仏名唱誦による撰述される上掲三種の中中国撰述經典のテキスト形成及びそれに基づいてなされる実践の様相が、信仰集団と儀礼の関係を軸に解明される。造像銘から最大限の情報を引き出し、仏教の中國的受容と中國内部における地域化の問題に新たな光を当てる試みである。

まず第二章では晋城市澤州縣青蓮寺発見の北齊乾明元年（五六〇）銘石刻上に表された造像銘と、北涼沮渠氏の要請による撰述とみなされる『大方等陀羅尼經』に説く十二夢王（華聚菩薩が陀羅尼によって降伏され護法神王に転じた十一人の魔王）にかかる因像を取り上げている。このうち一王を夢中でみれば七日の懺悔行法を授かるという同經の所説に基づき、著者は同經に基づく「方等懺」という懺悔の行法のうちに、仏菩薩の種々の瑞相をみるという神秘体験を求めてなされる好相行（ここでは護法神としての十二夢王）、及び十二夢王の称名が組み込まれていること、好相行が滅罪の度合を示す基準となっていたことなどを実作例に即して浮かび上がらせる。因像の典拠はすでに解説されていたものの、特

判然としない点が惜しまれるが、菩薩の階位と名号を照応させた造像の実例が確認された意義は大きい。

第五章以下では東魏以降に大きな展開をみせた、觀音信仰と西方淨土信仰の様相を具体的に示す事例が扱われる。

まず第五章は東魏以降に觀音造像が急増するという現象（佐藤智水説）に注目し、そこで特に大きな役割を果たした偽經『高王觀世音經』の成立・流布の過程と造像の関係を取り上げる。著者はこの「高王」が高歛であり、在世中にして用いられていた呼称であることを確認、高歛が渤海高氏を詐称して渤海王についた北魏太昌元年（五三二）九月を年代上の指標として掲げ、この時点ですでに取り巻きの間に高歛＝觀音の化身という認識があつたと指摘する。ついで天平年中（五三四～七）に孫敬德なる者の處刑に際し同經誦誦の功德で觀音像が身代わりとなつたという靈驗譚についての道宣の著述（『三寶感通錄』など）が王勗『齊書』『齊誌』を資料源とする蓋然性が高く、靈驗譚が經典成立とほぼ同じ頃すでに成立流布していたことを解明する。河南省鶴壁市五岩山摩崖・石窟群中最古の紀年をもつ東魏・興和元年（五三九）銘造像記が大きく取り上げられ、著者は「高王寺」主の道該らが觀音像（第五区第六窟本尊）を造つたという本造像記にみえる檀越主「爾朱妃」が、爾朱榮の娘でもと北魏孝莊帝の皇后たったがのち高歛の室となり、出家したという「大爾朱」にあたる可能性が高いことを指摘、高歛が自身の名を冠した寺院で觀音像を制作させ、その靈異を喧伝すべく像にまつわる靈驗譚が創出されたという流れを想定する。

また諸本の綿密な対校をもとにテキスト復元がなされ、撰述当初の姿を最もよく留めるのが先行研究の指摘する無紀年のサンフランシスコ・アジア美術館本ではなく、杜文雅（雍）造像碑（河南省禹州市博物館蔵とされる）碑陰下部に刻される武定八年（五五〇）本であることが考証される。読誦經典としての性格ゆえテキストの厳密さがあまり重視されず、これが文字の異動の多さに反映されているという見解も留意される。

第六章は「觀世音仏」の尊名を記す石刻やこの仏名を反復する敦煌写本など、觀音が仏として信仰されていたことを示す北朝時代の事例を取り上げている。著者は「觀音の成仏」に言及する経説のうち、翻訳經典が西方淨土で阿弥陀の後を継ぐとするのに対し、偽經特に『觀世音十大願經』が「将来觀世音仏となるが、全ての衆生を救済しつくすまで成仏しない」という誓願を過去世にこの闇浮提で立てた」と説くことに注目し、①「釈迦をつぐ者」として觀音を世代的系列上に定位する、②釈迦滅後にこの闇浮提で発揮される觀音の救済力の由来を説明する、という要請に応えるものであったことを解説する。また河北省涉県木井寺の北齊・武平四年（五七三）銘刻經碑や隋代の曲陽県八会寺刻經龕に、同經所説の觀世音十大願が「遺教經」（『仏垂般涅槃略說教説經』）とともに刻まれていることも、同經を生んだこの状況の延長上に位置づけられる。「現世の觀音」「來世の阿彌陀」という救済の分掌関係を図式化するこの現象が著者によつて指摘されたことは、東アジアにおける偽經の成立と普及が、既存の尊格に対する新たな意味の賦与やキャラクターの鮮明化などの工作と密接に関わっていた

ことを示す点で意義深い。「三度称名して救済されない衆生がいるなら正覺を成じない」という大願はまさに觀音の称名ひいては悔過儀札を根拠づけるもので、実践面における觀音信仰の本質と構造が浮き彫りになつてゐる。

第七章は生天・淨土信仰に関連する造像記の文例が網羅的に検討され、死後の行き先として天よりも西方淨土が優勢になる境界を五二九年におく侯旭東説の妥当性を再確認しつつも、地域性など新たな視点を加味して、その歴史的展開をより明瞭にあとづけている。北魏から唐の造像記における「無量寿から阿彌陀へ」という呼称の変容（著者は北朝で生じたと考える）は塚本氏以来注目されてきた現象であるが、無量寿から阿彌陀への仏名の変化が北齊後半期に山西ではなく河北を中心で発生し、これが生天と淨土信仰がないまぜになつた前代の信仰が阿彌陀信仰に一本化されいく流れと連動していることが解説される。著者はこの変化に曇鸞の教化の影響をみる立場には否定的で、北齊初の安陽小南海石窟中窟にみられる僧稠やその弟子である智舜ら、太行山脈周辺で禅觀念誦を軸に活動した「禪師」が阿彌陀造像に関与し、そこで重視された『觀無量壽經』が大きな役割を果たしたという展望が示される。

隋による中国全土の再統一以降、文帝が推進した一州一寺制や仁寿舍利塔の建立などの宗教政策は、北朝仏教の多様性が収束に向かい、長安を中心に新秩序が生まれたことを象徴する。著者は第二部最後の総括で北朝造像を「仏教実践の実験場」という的確な言葉で隋唐佛教前史に位置づける。実験内容の多彩さは研究対

象としての複雑さと一体だが、その諸相を多様性のはらむ豊かさを損なわせずに体系づけた点にこそ、本書の稀有な意義がある。

三

著者が世界の研究者に先んじて解説した点は枚挙に暇ない。偏った読後感の域を出ないが、美術史を専攻する評者の立場で、学界を裨益するであろう諸点について補足する。

第一は彫刻の素材・技法・形式・図像など即物的な視点から北朝造像の歴史を描こうとする際の、信頼すべき最新の指針が、文字資料の側から与えられた点である。

一九五〇年代における河北の白玉造像（曲陽・定州）、ここ二三十年來の山東造像（青州・諸城・博興など）の出土などを受け、新中国では北魏分裂以降の華北造像の資料が激増した。六世紀後半、特に北齊時代を中心とする造像様式の展開を語る際、西方から新たにたらされる中央アジア的要素と、南朝あるいは海路經由でもたらされるインド・東南アジア的要素の関係をどう理解するか。

一二〇一二年、河北省臨漳県鄆城遺址北吳莊村で仏像約二九〇〇件が出土するという大発見があったことは記憶に新しい。本書冒頭には鄆城出土の北齊天保元年（五五〇）銘・長孫東妻陸氏造像

が、唯一のカラーポロジで掲載されている。白玉製の本品は金箔・彩色がよく遺る、出土造像中の最優作の一つである。この造像群は河北造像・山東造像それぞれに近い作例を大量に含んでおり、東魏・北齊の中央造像の実態が響堂山造像のイメージに限定されることのない、相当幅広い要素を含むものだったことが判明した。資料を欠いていた鄆都における単独像の状況が具体的に浮かび上がつたことで、様式の形成・発信の拠点や伝播経路についての中央と周辺地域の関係をめぐる議論は、再考を促されている。

著者は天保元年銘像を「阿彌陀」銘造像の最古例として大きく取り上げ、浄土信仰の転換点に位置する重要作例として、いち早く佛教文化史上に定位した（第二部第七章）。宗教史上的動向と形象の語る歴史がどう連動するかという議論の精度の高まりを予感させる最先端の知見であり、刊行の意義を象徴する成果といえる。

第二は当時の宗教的実践の場における仏像の機能及びその思想的根柢を捉える上で有効な枠組を示した点である。この問題意識は第二部に貫しており、注目すべき提言が多い。

前出の鄆城出土の白玉阿彌陀像の制作された五五〇年は、『觀經』による九品往生圖の現存最古例をもつ小南海中窟の造営開始年である。著者は觀音・勢至兩菩薩を脇侍とする無量壽三尊の造立を説く武平四年（五七三）の臨淮王造像碑が同經所説の三尊の視覚イメージを引用していることを指摘し、阿彌陀仏の造像が觀想の実践と直結していたことを解説した。また第四章ではその主役である五六三年銘造像記の「仰觀尊顏」という文言に注意し、菩薩の階梯中最高位寸前にあたる等覚の修行として『理珞本業

経」の経文に違背してまで、菩薩の修行階梯の最高位の修行として、仏の尊顔を觀ずることを掲げた」とみて、觀想を最重要視する考え方を反映した造像の具体例を示した。これは第二章に言及がある好相行とも深く関わる問題だが、根底に位置づけられるのは、仏と出会うという体験の希求である。著者の研究は淨土信仰と神仙思想の分離、『觀經』の影響力拡大に伴う图像と実践、その拠り所を可視化する存在としての往生図／淨土圖などの制作といった諸事象を連続的に捉えることを可能にし、それが宗教思想史の展開と本質的な次元でリンクしている点を明確にしている。肥田路美氏により道筋がつけられた、隋唐時代における大画面変相図の成立をめぐる近年の美術史の議論にも、基軸を与える内容である。

以上は觀想・視覚表象・造形作品の相互関係に関わる考察だが、山西の重要作例を素材に懺悔の場における造像の意義を論じた部分でも、仏菩薩の救済が及ぶ範囲に人々がよせた関心をめぐる議論を通して、感応思想を介して像と信者の間に結ばれる関係の前提をなした考證が明らかにされる。著者は『方広経』の成立に際し文言・思想の両面で最重要視されていた經典が『涅槃經』だったことを確認し、父を殺した極悪人の阿闍世王が仏前での懺悔によって救済されると説く『涅槃經』が『方広経』へと展開した核心に、前者が掲げる「一闡提の救済」という思想をさらに推進する考えがあったことを指摘する。同時に一闡提についての認識が「人物の状態の概念」から「罪行為の概念」への力点の移行として捉えられることも明らかにした。懺悔滅罪を説く漢訳經典の記

載と、これを思想的基盤とする実践の間に（実践の典拠となる）観音像の成立という過程が存在し、それは滅罪思想を強力化・明瞭化する操作と連動していた——この問題に強い関心を抱きつつも、兩者間に横たわる溝をうまく説明できなかった評者は、当該部の考證に目から鱗が落ちる思いであった。『方広経』に基づく議法はわが国でも行われたが、東アジアにおける悔過の構造を深層から理解する上で、本書は大きな手がかりを与える。

第三は主に第二部第五章で展開される、特定の尊格（観音）と権力者（高歛）の表象の重層、及びそれと造像の関係にまつわる考察である。高歛周辺でその尊称（高王）を冠した偽經（高王觀世音經）と造像（高王寺の觀音像）の力が喧伝されるにあたり大きな役割を果たしたとされる孫敬徳の靈驗譚は、死刑執行の場で振り下ろされた刀が三度折れたという内容であり、敬徳が造った觀音像に三刀の痕が見つかったという話を伴う。靈像を主役とするわが国の寺院縁起の原形のような構造をもつ話であり、その点でも東アジア規模での展開が問題となろうが、本章末尾で著者は、唐初の法琳が処刑前に『高王經』の靈驗譚の所説に沿って觀音を念ずべきところ、ひたすら太宗を念じていたと答えて赦免されたという逸話に言及する。そして太宗を觀音と（評者注：同時に勢至とも）同一視してその德治を称揚する言辞（『唐護法沙門法琳別伝』）に注目し、同經成立時における高歛への賛嘆も同様の論理構造をもっていたという推測を導いている。

また觀音造像と靈驗譚の接点についても具体例に即した言及があり、孫敬徳を定州の人とする物語の記載と、河北曲陽修徳寺の

議論を展開している。第一部第三章には西魏以降の關中において、道教像が激減する一方で氐・羌などの少数民族による仏像碑が増加する現象への言及があるが、在地勢力と流入勢力の関係による地域社会の流動性、特に洛陽・鄆・晋陽などの中心都市におけるそれが、どの程度まで造像を通して指標化できるかという問題は、多分野の研究者が関心を寄せる部分であり、次なる展開に期待を抱かせる。

明晰かつ具体的な叙述のうちに、精確なテキスト読解に裏付けられた重厚な考證を通して、造像を取り巻く人々の當為が鮮やかに浮かびあがる。評者の力不足もあるが、こと本書に関しては、読むほどに幾重にも波が押し寄せてくるような感覺にとらわれるばかりで、批判的な言辭が思ひ浮かばない。無紀年として無銘の、造形そのものを分析しない限り歴史上に定位できない作例を扱うこととは美術史研究者の責務だが、それを単に資料を増やすための當為に終わらせないためにには何が必要なのか、考える契機を与えたと前向きに捉えるほかない。ともあれ著者の研究成果の全貌が、他言語に先がけ日本語で通読可能になったことを、まずは素直に喜びたい。

著者は本書全編を通して、造像銘の包括的・定量的分析によつて各地域の傾向を抽出する一方、官／民、聖／俗、學問／信仰、エリート／大衆などの単純な二分法を常に相対化してきめ細かなことを認識させるに十分である。

著者は本書全編を通して、造像銘の包括的・定量的分析によつて各地域の傾向を抽出する一方、官／民、聖／俗、學問／信仰、エリート／大衆などの単純な二分法を常に相対化してきめ細かな